

# 歴史の道ガイドブック



玉名市教育委員会

## 保田木城跡 玉名市高瀬所在

南北朝時代の正平年間(1346～1369)、菊池筑前守武時の子武尚が菊池より来て、高瀬の高台上(保田木台)の要衝地に城を築き、保田木城と称しました。子武国になって初めて高瀬氏を名乗るようになり、代々この城を本拠としました。5代武教以後は朝鮮国とも直接貿易を行い、海運活動も活発でした。その後、菊池家督の継承に端を発した菊池本家と宇土氏との争いの中で8代目武基が戦死しそれに伴って保田木城主も絶えました(1500年代初めごろ)。

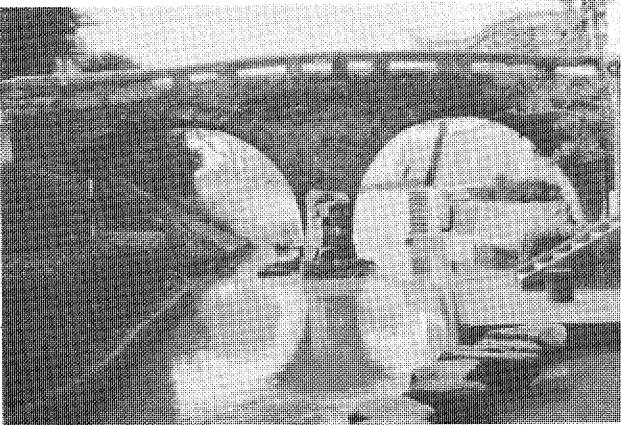
その後、江戸時代になると、寛永11年(1634)に五ヶ町の一つになり、細川重賢により明和2年(1765)高瀬町奉行の制度が確立しました。そして、奉行所はこの保田木城跡に設けられました。

現在城跡には保田木神社があり、境内には縄文時代(今から約4000年前)のゴミ捨て場である貝塚もありましたが、現在はコンクリートで覆われており見ることはできません。

## 裏川と高瀬目鏡橋 (県指定建造物) 玉名市高瀬所在

高瀬で一番標高の高いところは保田木神社周辺(保田木台)です。保田木台は三ノ岳の火碎流によってできました。そして、菊池川の水流によってこの台の下流側に砂嘴状の砂洲ができました。高瀬は、その上に営まれた環濠都市の形をとります。

裏川はその名残りで町の東側を流れ、菊池川との間に自然堤防の河原ができました。江戸時代は、菊池川のその河原に高瀬町の渡頭(とと、船着場)が造られましたので、裏川にはそこに渡るために小さな橋が10数基造されました。今は、その内の石で造られた桁橋だけが残っています。多くは、高瀬商人たちの個人の商品搬入用に造られたもので、中には大八車の車輪を通すための溝が掘られ



た石橋もあります。町と渡頭とを結ぶ橋は、土戸橋(つっどばし)の外、2、3しかありません。

高瀬は肥後5か町(熊本町・川尻町・高橋町・八代町・高瀬町)の一つです。ですから、町の玄関に当たる往還(今の県道、2級国道クラス)の出入口には、立派な石橋が造されました。三池往還には町の東玄関に「高瀬目鏡橋(複アーチの石橋)」、西玄関に「錦橋(石の桁橋)」、山鹿往還には「秋丸橋(単アーチの石橋、天保3年築造)」が造されました。高瀬目鏡橋は嘉永元年(1848)、高瀬町奉行高瀬寿平のときに架けられました。総長15メートル、幅4メートル、アーチの半径3.35メートル、路面から水面までの高さ7.5メートル、二重アーチの石橋です。水切りは、現在上流側にのみ残っていますが、整備工事のとき下流側にも松の枕木、杭などが確認されましたので、元は上下流ともあったと考えられます。建設費用は、高瀬町の外、坂下手永・小田手永から負担されました。

## 龍造寺隆信の首塚

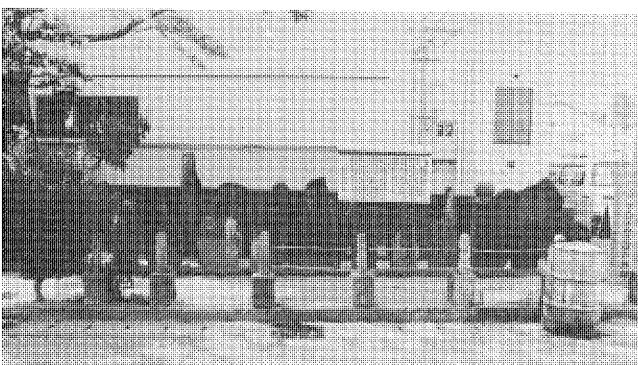
玉名市高瀬新町願行寺境内所在

高瀬新町願行寺本堂の裏にあります。天正12年(1584)3月24日、肥前(佐賀県)・筑前・筑後(福岡県)の三ヵ国の領主であった龍造寺山城守隆信は、数万の大軍を率いて島原に攻め込みましたが、8000人の島原の有馬氏・薩摩の島津氏の連合軍と激しい戦いの後ついに力つき首をはねられて命をおとしました。隆信の首は、薩摩軍が本陣としていた八代へ持ち帰る途中、玉名郡高瀬川(今の高瀬大橋付近)にさしかかると、いきなり首桶が重くなり川を越すことが出来なくなりました。そのため、高瀬願行寺の四阿弥陀上人という僧が葬儀を行い、境内に埋葬しました。胴体は、火葬の後佐賀龍泰寺に葬られましたが、300年忌に当たる明治4年に、首とあわせて、その菩提寺である佐賀高伝寺に改葬されました。現在もその首塚の石塔は、願行寺境内に大切に残されています。

## (市指定重要文化財) 宝成就寺跡古塔碑群・石仏群

玉名市高瀬所在

宝成就寺は、延喜4年(904)真言宗大覚寺として高瀬談議所町に建立された寺院と伝えられています。途中2度の火災にあうもそのつど再興され栄えましたが、明治10年2月に西南の役の戦火のため焼失して、ついに廃寺となりました。古塔碑群は、当時まま残る石仏堂の北側に、寺跡に散乱していた数多くの古塔碑を集めたもの

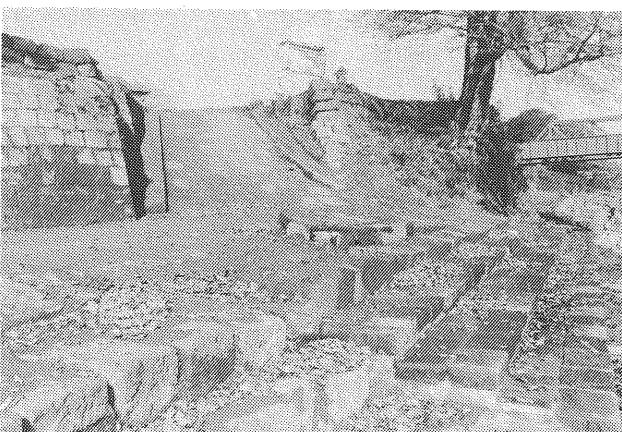


で、五輪宝塔1基、無銘の板碑石5基を含む歴代住職の墓碑や供養塔33基、南側の覆堂に収められた石仏4基、地蔵菩薩浮き彫り、無縫塔おのの1基、堂前の宝筐印塔1基よりなります。

これらは、觀応2年(1351)から延享4年(1747)までの397年間のものです。それ以前のものは、数度の火災のため失われたのであろうか残っていません。

## (市指定史跡)高瀬御蔵と高瀬舟着場 玉名市永徳寺所在

高瀬御蔵(たかせおくら)は、江戸時代に肥後細川藩が菊池川流域の米(年貢米)を集めた藩営の米蔵です。藩はここから大坂に米を送りだし、お金に替えていました。高瀬舟着場とは、この御蔵の付属施設のこととして、昔は舟着場のことを渡頭(ととう、とと)と呼びました。ここでは上流側を旧渡頭(きゅうとと)、下流側を新渡頭(しんとと)と呼んでいます。また、米を積み込むための石の坂道を「俵ころがし」又は「俵ころばかし」、石の階段を揚場(あげば)と呼んでいます。高瀬御蔵から積み出された米は「高瀬米」と呼ばれ、大坂の米相場の基準となっていました。それは、高瀬米が年間25万俵(15,000トン)という大量であったこと、しかも、ある程度、質の高いお米だったからです。



なお、この高瀬付近は、豊臣秀吉の直轄地(豊臣蔵入地、米は「蔵入米」という)がありましたので、そのための蔵が必要だったと思われます。この高瀬御蔵の設置は、その豊臣直轄地の米倉庫としての「御蔵」造営が出発点であったのかもしれません。

## 西郷小兵衛戦死の地 玉名市永徳寺所在

西郷隆盛の末弟小兵衛は明治戊辰の役に加わり、京都へ遊学のち加世田郷副戸長をしていたが明治10年西南の役には一番大隊一番小隊長として参加。沈着・寡黙・衆望が篤かった。2月7日の会議では拙速を取るべしと、長崎を急襲して軍艦を奪い、神戸・横浜を抑え東京占領を主張したが容れられなかった。

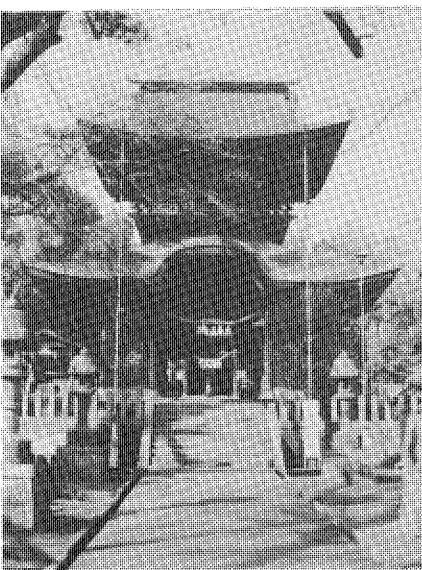
22日、熊本城包囲には段山(段鉢)にあり、26日夜高瀬攻略に加わるため出町を発し、吉次峠・伊倉を経て、27日昼前高瀬川正面に到着したが渡河できず、村田新八の命により



600人を率いて迂回し、下流の大浜を渡河、岩崎原・繁根木へ進出した。ここで銃撃の激戦となり、指揮中、左胸に弾丸を受け、永徳寺村に退き絶命、年31才。繁根木川尻左岸堤防上に戦死の地の碑がある。

※ 荘園とは、平安時代からの貴族や大寺院、地方豪族の私有地のことをいう。地方豪族などが自分で荘園を開発したときは、「開発領主」と呼ぶ。これらの荘園は必ずしも税を免除されると限らなかった。特に、地方の開発領主の場合は、国家が派遣した国司(現在の知事クラス)から無理な脱税を強制されることがしばしばであった。そこで、開発領主は中央の有力な者に自分の荘園を寄進した。この寄進を受けた領主を「領家」という。それでも国司の圧力から荘園を守りにくくなったら、領家は自分よりもさらに上級の大貴族や大社寺に寄進する。この最上級の荘園領主を「本家」という。

## 繁根木八幡宮 玉名市繁根木所在



繁根木八幡宮は、京都の石清水八幡宮を勧請したもので。伝えられるところによりますと、第62代村上天皇の応和元年(961)に紀(大野)隆村が勧請し、大野別府250町歩(250ヘクタール)の総鎮守にした、ということだそうです。大野別府とは、大野荘とも呼ばれる荘園です。開発領主は紀姓の大野氏です。領家(りょうけ)は福岡の筥崎八幡宮、本家(ほんけ)は京都の石清水八幡宮となります。

その後、戦国時代が続き、大野氏とその後ろ盾の菊池氏も没落します。そのため、この繁根木八幡宮も衰退しますが、加藤清正が入国し城北の有力都市の神社として再建整備に努めました。神社の神殿や周りの石垣などはそのときの建設だと伝えられています。このうな丁重な

扱いは、細川藩になっても続きます。石鳥居は藩の許可で建設できるのですが、ここの石鳥居は、慶安5年(1652)に建てられた県下で最も古いものの一つです。それだけ、藩も重要視

したということになると思います。また、楼門の「八幡宮」の扁額も、安永年間(1780頃)の藩主、細川重賢の筆によるものです。

社僧(神宮寺)は、繁根木山寿福寺という天台宗の寺院ですが、この後の説明に譲ります。

## 繁根木山寿福寺

玉名市繁根木(駿鉾文化センター付)

繁根木八幡宮の社僧である寿福寺は第53代淳和天皇の勅願によって天長元年(824)加善大徳を開山に、薬師如来を本尊として建立されたと伝えられ、以来比叡山延暦寺末寺として繁栄しました。しかし、寿福寺は天正の戦乱(1580年代)で龍造寺氏や島津氏、大友氏等の数度の戦いの影響によって衰退しました。その後、寛文年間(1660年代)に再興されました。

宝暦12年(1763)に豪潮が弟子の豪潮とともに寿福寺に入り、安永5年(1776)に豪潮が寿福寺主となると、再建後まだ充分でなかった寺内の充実に力を注ぎました。そして、天明3年(1783)には梵鐘が造られ、寛政9年(1797)に京都の仏師に铸造させた薬師如来と、木造金泥日光・月光の両菩薩を本堂に迎え入れました。ここではじめて寺としての面目を一新しました。

しかし、豪潮が文化14年(1817)に尾張藩に招かれ、寿福寺を去った後は寺は廃れてしまい、廃寺となります。そして現在は、日光・月光の両菩薩が跡地に建てられた堂にまつられています。

## 豪潮と宝篋印塔

(市指定重要文化財)

玉名市繁根木所在

豪潮は寛延2年(1749)、玉名郡岱明町山下の浄土真宗安養寺の塔頭(たっちゅう)専光寺の次男として生を受け、幼くして知才に優れ、7才のときに寿福寺の豪旭の弟子となります。後に比叡山で修行しますが、安永5年(1776)に師豪旭の死去によって帰国したおりに檀信徒の懇望に応じて寿福寺を継ぐことになります。豪潮は仏母准提觀音を信仰して人々を加持で救い、「豪潮様」と慕われていました。三七日の修法による靈験が有名であり、光格天皇の妃の病を加持し宮廷の信仰も得ています。

豪潮はすぐれた宗教家ですが、多くの書・画の優品を残しており、その作品は淡墨で豪放な境界の書であり、現在でも「肥後三筆」として高い評価を得ています。



また、寛政3年(1800)52才のときに宝篋印塔八万四千基建立の大願を立て、初の宝篋印塔を建立しました。以来17年間にわたり鉄製、木製などの小塔を合わせ二千余りが造らています。

文化14年(1817)には尾張公の病を加持で治し、その後名古屋城下の万松寺に移り住み、晩年は岩窟寺の住職となり、天保6年(1835)に時雨庵にて示寂しました。

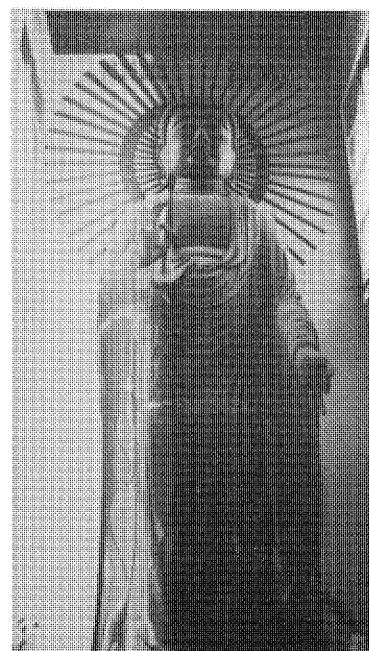
### 補陀落渡海碑 玉名市繁根木字宮後所在 (市指定重要文化財)

繁根木八幡宮裏の稻荷堂前にある高さ1.35メートルの安山岩の自然石で造られた石碑です。これは、永禄11年(1568)11月28日に下野国の弘円上人、駿河住善心、遠江道円らが、観音信仰のため海上にある觀世音の淨土とされる補陀落世界へ船出するにあたって、西光坊が施主となって海上の安全と、大願成就を祈って立てたものです。なお、石造補陀落渡海碑としては、伊倉本堂山の碑と共に、日本最南端と言われています。

### 読坂鑄造阿弥陀如来立像 玉名市繁根木所在 (市指定重要文化財) (読坂の黒ぼとけさん)

「読坂」(よみさか)と言いますのは地名ですが、現在堂が建っているところではありません。堂の前の道を下り、駅通りに出たら左折して、200メートル程歩きますと、三叉路になります。その辺りを読坂といいます。この「黒ぼとけさん」は、そこに立っていたのですが、事情があって、現在地に移されました。

この像は背中に書いてある銘文によりますと、天明6年(1786)8月、高瀬町の豪商古閑吉兵衛が先祖供養のために、京都の鋳物師(いものし)田中伊賀掾(いがじょう)に造らせたということです。青銅による铸造(ちゅうぞう)製です。像の高さは2.4メートルで普通の人よりもずっと大きく、金属で作られた仏様としては県内でも最も大きなものの一つです。



## (市指定史跡) 玉名郡衙と大湊 玉名市立願寺及び中

J R 玉名駅付近の小字地名は、「大湊」と云います。ここは奈良時代、玉名郡衙(くぬい)(郡役所)の海港であって、駅前広場一帯巾160メートルほどが港内で、駅の裏側に港の出入口が発掘されました。出土した材木から790±40年水害で一挙にこの港は埋没したことが判明しています。

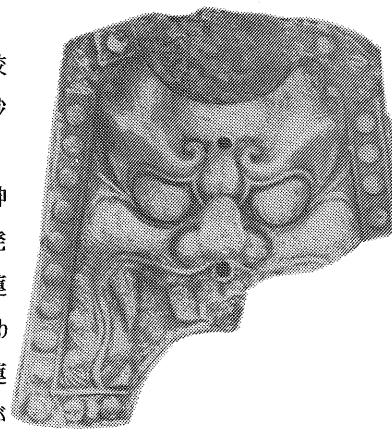
ここから真北に巾6メートルの奈良時代の官道（玉名高校と中央病院の間の凹道）が残っています、発掘の結果、砂利と厚板で舗装していたことがわかりました。

その北、上立願寺(かみゆうがんじ)の集落の最も奥に郡役所と神社の跡、その東、塔の尾台地に立願寺廃寺があったことも発掘で確認されました。廃寺からは白鳳（7世紀後半）の単蓮弁軒丸瓦(たんれんべんのきまるわら)、重弧文(じゅうこもん)の軒平瓦(のまひらわら)と、奈良時代（8世紀）の大宰府と同じ鬼瓦、数種の複蓮弁(ふくれんべん)の軒丸瓦、唐草の軒平瓦のほか、珍しい鬼面瓦が発見され、新旧の金堂跡や回廊跡も発掘、礎石(せき)を持つ三重塔の存在も確認されました。

その南、現在の疋野(ひきの)神社の付近にも立願寺廃寺と同じ瓦の遺跡がありますし、繁根木(はねぎ)八幡裏の稻荷山古墳前方部や築地蓮華からも発見され、五遺跡にも及ぶことが注目されています。

疋野神社は肥後に四座しかない延喜式(えんぎしき)の式内社(しきだいしゃ)で、古くて高い社格を誇り、玉名郡司日置(ひき)氏の氏神であり、疋野長者炭焼小五郎の伝説が残っています。

奈良・平安時代、宮中新年宴会の儀式に奉られる唯一の贊(はい)「腹赤の魚」(ニベ)は、おそらくこの大湊から大宰府の役人に奉じられて、船出したことであろうと考えられています。



## 木村鉄太の墓 玉名市大倉亀頭迫所在

木村鉄太は、日本で最初に世界一周をした人として知られています。天保元年(1830)玉名郡立山村亀頭迫(現玉名市)に生まれ、名は直敬、号を蟠山と称しました。万延元年(1860)、幕府の遣米使節に随行し、使節団と共にブキャナン大統領を訪問しました。鉄太は使命を果たした後、帰りはアフリカの喜望峰を回り、インド洋を経て約10ヶ月にわたる世界一周をしました。帰国後「航米記」を著し、アメリカの実状を紹介し、文久2年(1862)33才で没しました。墓は市内亀頭迫にあります。なお、鉄太は高瀬の豪商で200石の寸志知行取木村家の子孫です。鉄太の義弟木村弦雄は熊本中学校長、済々黌校長などを歴任。

(市指定重要文化財) 伊倉切支丹墓碑 玉名市伊倉所在



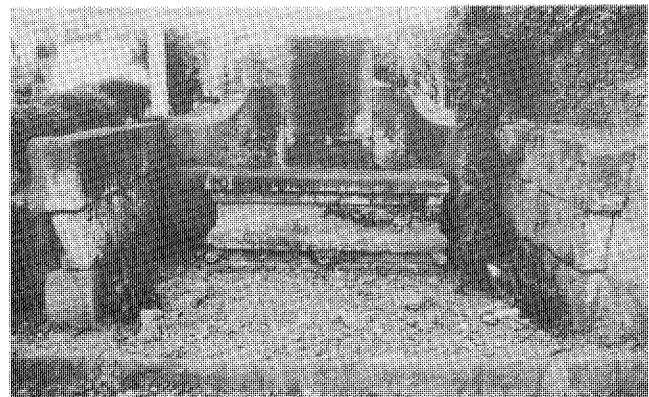
この墓碑は、16世紀中ごろから後半にかけて作られた蒲鉾型をした典型的なキリスト教の墓石です。だれを葬ったものかはわかりません。ですが、この地にキリスト教がいたことを具体的に示すものです。前面に円形の中に花十字を刻印し、全長57センチ、高さ27センチ、底面幅35.5センチになります。明治初年、掘り出されました。

永禄9年(1566)、ポルトガルの宣教師アル

メイダが高瀬に来て、キリスト教の布教を始めます。キリスト教大名の大友宗麟もこの地域を領地にしていましたので、多くのキリスト教信者が生まれました。寛永11年(1634)には、伊倉(唐人町)に隠れキリスト教が見つかり、その後江戸時代を通じて、キリスト教の類族改が行われました。なお、石火矢(大砲)が、高瀬(伊倉を含む)に日本で最初に揚陸されたのも、宗麟とキリスト教が関係するものと思われます。

(県指定天然記念物) 唐人船繋ぎの銀杏 玉名市伊倉所在

伊倉北方にあり、樹齢およそ600年、幹の大きさが目の高さのところで8メートル、高さが25メートル、枝は無数の小枝に分かれながら20メートル四方にひろがっています。伊倉台地の西端の下ー帯は、丹倍津(にべつ)といわれた良港で早くから唐人(中国人)が盛んに来航しており、江戸初期まで日明貿易の根拠地として栄えていました。このころ船の綱をこの銀杏の木に繋いだというところから、その名があると伝えられています。



肥後四位官郭公墓

(市指定重要文化財) 玉名市伊倉所在

伊倉鍛冶屋町にあり、「しいかんさんの墓」と呼ばれています。郭公は明朝に仕えた中国人で、四位官という位をもつ人物でした。明朝の興隆に努力する一方で東洋貿易に乗り出し豪商としても活躍しました。しかし不幸にしてこの地で客死したた

め、その子珍栄が、元和5年(1619)に墳墓を立て、この靈を弔ったものです。この墓域は、その形状、技法ともに中国様式の特色が顕著で珍しい形式のものです。周辺には、伊倉字堂山の振倉謝公の墓、北牟田字三官の北牟田塚墳墓や天水町部田見の三官林均吾の明人の墓があります。

## 振倉謝公の墓 玉名市伊倉所在

玉名市伊倉字堂山の墓地の中にあります。清から迫害を受け渡来した明人の墓と考えられています。「ふるくらしゃこう」の墓と呼ばれていますが、明の人ですから、音訓みにすべきという反対意見もあります。「ふるくら」と呼んでいますのは、この墓のある堂山の谷を越えた北側の台地が「古伊倉(ふるいくら)」と言いますので、「振倉謝公」がその地を根拠地として貿易などを営んだ商人であろうから、「ふるくら」と呼ぶべきだということだと思われます。墓は同じ形式のものが2つ並んでいました。熟年の男女が納まっており夫婦と考えられています。いずれも貝殻を混じえた漆喰で家形の棺槨(棺を納める室)をつくり、その中に木棺を納めた形式のものです。

## (市指定重要文化財) 宇佐一族の墓 玉名市伊倉字堂山所在



大宮司の直轄神領地(伊倉別府という莊園)として代々伝領され、また肥後北部の要衝地として宇佐氏が最も意を用いたところです。

伊倉八幡宮社僧本堂山報恩寺跡の一角に、長さ6メートル、高さ1メートルの基壇上に整然と並ぶ7基の五輪宝塔群があります。これらは大宮司宇佐一族のお墓です。これらのうち宇佐公満墓、宇佐大宮司公長塔、地頭沙弥行恵供養塔の3基が市指定の文化財になっています。伊倉は、康和5年(1103)頃より宇佐

## 外島宮住吉神社の文化財

(市指定文化財)

大浜町の氏神外島宮(いしまぐう)は大浜町の洲(白須)の中央部に鎮座しています。延久元年

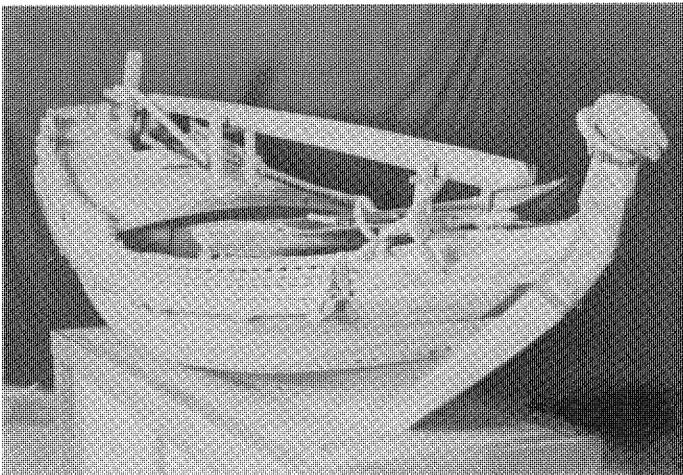
(1069) 摂津の波速(はや)の浦から流れ着いた浮舟大明神を、蟹夫(かにぶ;漁師)の八郎らが迎えて祀ったと伝えられています。あるいは菊池則隆建立とも伝える。天正12年(1580)3月24日横島での海戦のあと竜造寺勢を追った薩摩勢によって略奪に遭ったといわれています。神殿の中に明治4年(1871)寄進された長さ2.98メートル幅84センチ、高さ47センチ

に及ぶ精巧な廻船模型が納められ(玉名市 指定文化財)、年季祭のとき、町中や大川の上を引き廻されます。最も古い宝暦(1650年代)の廻船模型は、九州大学九州文化史研究所に陳列

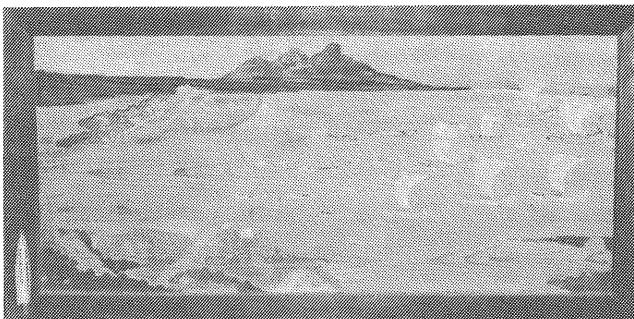
され、次の代のものが玉名市歴史博物館に出品されています。最近、四国金比羅さんに大浜町民吉丸が奉納した享和2年(1802)の廻船模型(国指定重要民俗文化財)も知られるようになりました。

外島宮境内の高麗犬(市指定文化財)は、総高2.60メートルの花崗岩製の大きなもので、大坂長門屋吉兵衛、備中玉島西国屋半十郎、長州赤間関高瀬屋吉兵衛、高瀬宮崎屋彦太郎などの問屋や当地の民吉丸、栄来丸、生久丸、大徳丸、大愛丸、宝寿丸、寿徳丸、神亀丸、亀若丸、神力丸、神宝丸などの船頭たちが天保15年(1844)寄進したものです。このほか文政4年(1821)長門屋吉兵衛寄進の石燈籠や慶応3年(1866)平田船仲間中寄進の琴平社石祠などがあります。

拝殿に掲げてあったたて2メートル、よこ2.43メートルの超大型の絵馬(市指定文化財)は、文政13年



(1830) 大坂堂島の長門屋吉兵衛寄進のもので、大浜や対岸晒の町並や港を詳細に描き、沖合に19艘の廻船を並べています。現在、市の博物館に収蔵され、その縮小復元図が展示されています。



## 大浜渡頭と大浜番所

玉名市大浜町

天草・島原の乱の時（1637）も高瀬から多くの軍勢が出陣し、その外港大浜には番所が置かれ、乱後も3匁筒10挺、槍10本を常備する最も重要な番所となりました。大川へ張り出した石垣の内が番所跡でした。現在は皇太子（今上天皇）誕生をお祝いした珍しい記念碑や後藤是山（ぜん）の句碑が建てられています。

番所跡のすぐ下手に昭和4年架けられたコンクリート橋がありましたが、平成8年取りこわされました。この橋のたもとが江戸時代の大浜渡頭（と）の跡で、石の階段の両脇に米俵を転がす石敷の坂がありました。ですが、今は石垣の下で見えません。

鎖国で寂れた伊倉津に替わって、寛文・元禄（1660年代後半）ごろ大浜町が賑わい、大舟14艘、水夫も国中最多の155人が居て、菊池川筋の物資を運び、手永（てなみ）会所も置かれました。

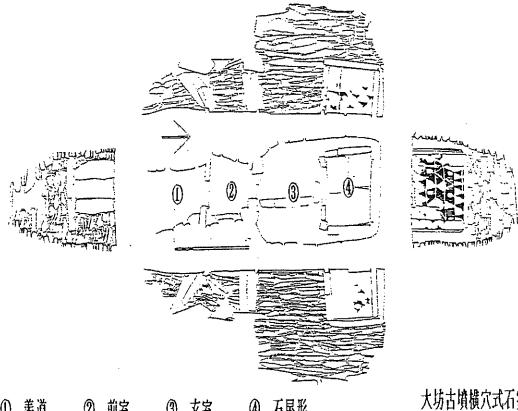
延宝8年（1680）藩士による直接知行を止めて、年貢米は藩が一括して高瀬御蔵に納めさせ、それを大坂堂島へ輸送するようにしましたので、番所も対岸や下流の晒（さらし）村に移転しました。

しかし、大浜町の問屋や船頭たちは、農家の保有米や雑穀などの納屋物（なやもの）を流域から買い集め大坂へ送る仕事を続けました。帰りの荷は綿でした。浜千軒と呼ばれるほどの繁栄を誇りましたが、正徳4年（1712）370軒を焼失するなど5度の大火に見舞われ、火除け地を設置（1822）したり、土蔵造りの家（イギエ）を殖やすなどの対策を講じて、特色のある町並が形成されました。

明治となり舟運は止みましたが、廻船の大型模型が奉納されている外島（としま）住吉神社年季祭の水上御幸（みゆき）ホーランエは勇壮なことで近隣に知られています。

## （国指定史跡）大坊古墳 玉名市玉名字大坊所在

菊池川と支流の繁根木川に挟まれた東西に延びる丘陵部南端の、玉名平野を一望できる位置にあります。この古墳は東西方向をむいていて、全長42.3メートル、後円部の直径21メートル、前方部の幅25メートルの古墳時代後期（6世紀前半）の前方後円墳です。内部は全長6メートルの横穴式石室で羨道（せんどう）・前室（ぜんしつ）・玄室（げんしつ）からなります。玄室は長方形で、



① 羨道 ② 前室 ③ 玄室 ④ 石屋形

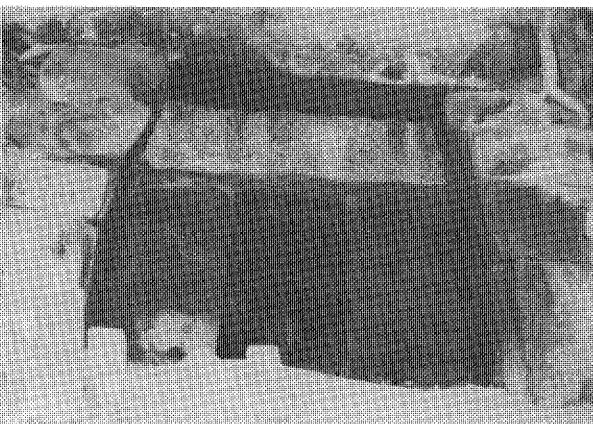
大坊古墳横穴式石室

幅1.9メートル、奥行3.4メートル、天井までの高さが2.78メートルあります。奥壁に沿って石屋形（いしゃかた）があり、その内面と袖石（そいし）に装飾が施されています。装飾は赤・青の二色で、円文・三角文・連続三角文等が描かれています。石屋形の天井石と両側石、玄室に通じる玄門（げんもん）の扉石にも装飾が施されていますが、おおくは剥落し明瞭に見ることができません。またこの古墳からは、金製耳飾り・銀製耳飾り・大粒の真珠玉・金環・玉類などの装身具、直刀・鉄鎌など

どの武器類、鎧（よろみ）・杏葉（きょうよう）・鞍金具などの馬具類、須恵器・土師器などの祭器類、鉄斧といった工具類などの副葬品が出土しています。とくに装身具については、金製耳飾りなどに強い大陸色がうかがわれ、大陸輸入の高級品であろうとおもわれます。これらの副葬品からみても、この墓の主が当時玉名地方においていかに強大な権力をもっていたかをうかがい知ることができます。

## （国指定史跡）永安寺東古墳 玉名市玉名字永安寺所在

菊地川右岸の玉名平野を南に望む丘陵裾部に位置します。墳丘は大きく削平され、もとの形をとどめていませんが、円墳と考えられます。内部主体は、羨道・前室・玄室からなる横穴式石室ですが、前室の一部と羨道部は崩壊しています。玄室は長さ2.6メートル、幅2.4メートル、高さが2.7メートルあり、奥壁に沿って石屋形が設けられています。前室は現存長約1.6メートル、幅2.

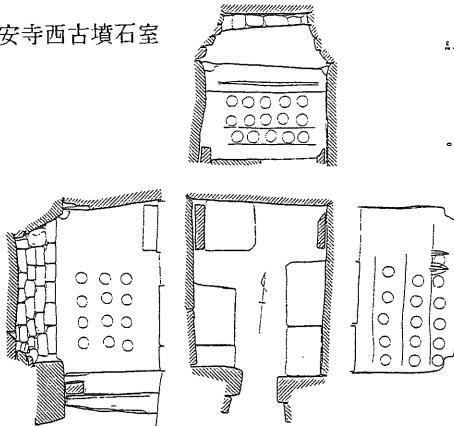


3メートル、高さが1.6メートルあり、左右側壁と玄門の前面に装飾文様が施されています。右側壁には下半部に大きな円12個を2段に並べ、下には1本の太刀と、上には2個の半円と1個の三角形を加え、上半部には大小無数の円と舟らしい絵が配置されています。左側壁には6個づつ3段に並べた上部に小円数個を配し、その中に馬らしい動物も描かれています。玄門の前面には、それぞれ交互に向かい合う連続三角文が縦2列に描かれています。円文や連続三角文は細い線刻によって区画されていて、すべて赤色で塗られています。この古墳は古い時期に開口されたため出土遺物は不明ですが、石室構造から6世紀中ごろのもので、同じ丘陵上にある大坊古墳に後続するものと考えられます。

## （国指定史跡）永安寺西古墳 玉名市玉名字永安寺所在

永安寺東古墳の西方約60メートルの同じ丘陵上に位置します。墳丘は直径約12メートル、高さ約4メートルの円墳です。内部主体は単室の横穴式石室で、玄室は長さ3.4メートル、幅2.8メートル、高さ約3メートルあります。奥壁に接して石屋形が設けられていたが、石屋形の天上石は失われています。玄室の奥壁・両側壁の下部には切石の巨石を各々1枚立て、その上部に切石を4段にわたって持送りながら積み上げ、その上に1枚石の天井石をのせています。装飾文様は奥壁と両側壁の巨石にみられ、横線で区画した中に線刻した円文が上下3段並び、奥壁に15個、右側壁に16個、左側壁に12個みられます。赤色顔料が部分的に残っていますが、文様部分のみを彩色したのか石室全面にわたって彩色したのかは判別できません。右側壁には円文のほかに舟の帆のような文様もみられますがはっきりしません。この古墳も永安寺東古墳同様、古い時期に開口されていて出土遺物は不明ですが、古墳時代後期（6世紀後半）の古墳で永安寺東古墳に後続するものと考えられます。

永安寺西古墳石室



## （国指定史跡）石貫ナギノ横穴群 玉名市石貫所在

繁根木川中流域の右岸に高さ約7メートル、全長300メートルに及ぶ岩壁があります。その岩壁の東側の面に45基の横穴が開口しています。多いもので14基、少ないもので3基それぞれ群集し、規模も大小があります。高いものは地上より5メートルの高さに位置し、低い



ものでは大半を地中に埋没させているものもあります。横穴の入り口（羨門）の多くは2重、3重のアーチ形および隅丸の台形で、この部分に同心円・三角形・円形・菱形などの連続文様を線刻し、赤色顔料で彩色しています。天井の構造には切妻の家形、寄棟の家形、アーチ形の3種があります。また墓室奥壁の石屋形の内壁・外壁に弓・矢・盾・舟・大刀などを線刻したのもあります。

内部構造は、大部分が正面の1段高いところに1つ、中央を縦に通した羨道の両側の側壁に接しあるおのの1個づつの屍床（じゆう）をもうけています。副葬品としては刀子・鉄鎌・鎧（やがんな）・玉類などが出土しています。これらの横穴は、古墳時代終末期にこの地方に権勢を誇った豪族一門の墳墓と考えられます。

## 石貫穴觀音横穴群 玉名市石貫安世寺所在



繁根木川中流域の右岸岩壁に造られた横穴墓群です。3基の大型の横穴と右やや下方に1基、上部の小型のもの1基の5基からなります。大型の3基のなかで中央の横穴には浮き彫りの千手觀音と平安時代ごろの十一面觀音石像があって穴觀音と呼ばれています。大型の3基の横穴はいずれも羨門部をアーチ型に3段に切り込み、その部分に赤

色顔料で円形と三角形の連続文様を描いています。また中央横穴と左横穴のあいだの外壁には韌（ゆき）（弓矢立）を大きく線刻してあります。内部奥壁には本瓦葺きの廂（ひさし）を思わせる石屋形を彫り出し、正面には軒丸瓦のような円筒状突起5個がみられます。墓室の左右にはそれぞれ舟形の屍床を設け、これにも廂を彫り出してあります。この横穴群のもっとも特徴的なところとして、本瓦葺きの廂を思わせる石屋形と千手觀音の浮き彫りがあげられます。これらは日本の装飾古墳のなかで類例がないため後世に造られたものとする説もありますが、おそらくは古墳時代終末期の、仏教文化の伝来とともになう古墳文化期から仏教文化期への移行期に

造られたためと思われます。これらの横穴は石貫ナギノ横穴群同様、古墳時代終末期にこの地方を治めた豪族一族の墳墓と考えられます。

## （県指定史跡）青木磨崖梵字群

玉名市青木熊野座神社境内所在

菊池川右岸の青木熊野座神社境内に、高さ約9メートル、全長約60メートルに及ぶ岩壁があります。その南側15メートルにわたって大小20の梵字が刻まれていましたが、そのうち10字がのこっています。岩壁南側半分に梵字で不動尊を表す「カン」、大日如来を表す「ア」を上下にからませ、これをたてに貫く剣の形を加えて一体として3段の蓮華座上に彫り込み、剣不動尊の仏体を表しています。この梵字は長さ1.9メートル、幅60センチの大きさで、梵字群中の主座を占めています。また隣接して阿弥陀如来を表す「キリク」の梵字を中尊とし、右に観音菩薩を表す「サ」と、左に勢至(せいし)菩薩を表す「サク」の2尊を従えた阿弥陀三尊を彫り込んであります。これらの梵字群は当地に阿弥陀堂を開いた唐の名僧善無畏三藏(ぜむいさんぞう)が刻んだと伝えられていますが、おそらくは、鎌倉時代後期に熊野座神社を拠点とした修験道の行者によって刻まれたものと考えられます。



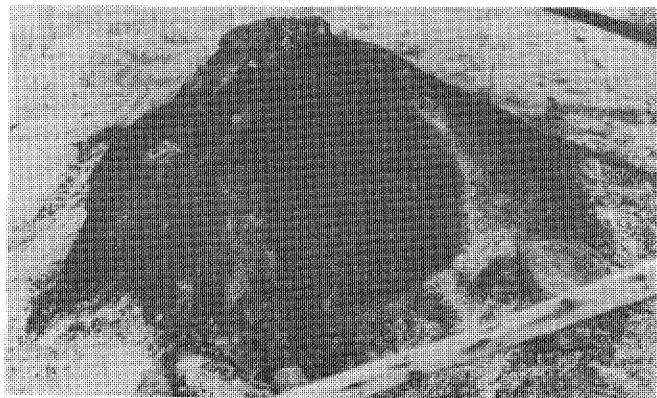
駐車場  
H2ストライ  
梵字はインド古代の仏教文字で、我が国へは仏教と共に伝来しましたが、平安時代終末期から鎌倉時代にかけて特に真言宗新義派に盛んに使用され今日に及んでいます。

## 六反製鉄跡

（県指定史跡）

玉名市三ツ川の西原所在

小岱山(501.4メートル)の中腹から山麓にかけて約30カ所の製鉄遺跡があります。これらの製鉄遺跡群のなかの一つが六反製鉄跡です。山の谷合いの緩やかな斜面に、砂をまぜた粘土で製鉄の



炉が築かれています。窯の全長1.4メートル、楕円形の最も広い中央部の幅55センチ、深さが65センチで、30度の傾きに造られています。窯の中や周りから出土した瓦器とよばれる土器などから、今からおよそ800年前の鎌倉時代のものと推定されています。この当時の製鉄は多くは山裾の谷川のほとりに営まれました。粘土で築いた窯(溶鉱炉)の中に砂鉄と木炭を交互に入れて火をつけ、両側からふいごの口を通して三昼夜間断なく強い風を注いで焼き続け、そうした後、炉を壊して中の溶けた鉄の塊を取り出し炉の作業を終えます。その後取り出した鉄は水に急冷させ細かくたたき割って、玉鋼(はまね)、銑(せん)、その他の屑がねの三種に分類し、玉鋼は梱包して出荷され、または大鍛冶場へ送られ、屑がねは大鍛冶場へ移して焼き直し精製されます。大鍛冶場は溶鉱炉に付設されたもので、たまにはこれに製品を造る小鍛冶場をもうけているところもありました。このように、当時は非常に原始的な方法で製鉄が行われていました。このような製鉄を「たたら製鉄」と呼んでいます。

## (市指定史跡) 伝左山古墳 玉名市繁根木77所在

玉名市役所の西約60メートルの国道208号線に沿う高台上にあります。直径35メートル・高さ5メートルの円墳で繁根木古墳ともいいます。内部主体は、前室と玄室からなる横穴式石室で、内部全面に朱が塗られていました。玄室の四壁にはそれぞれ一個の突起があり、北壁に接して石棚があります。また、玄室上部の古墳封土中に石棺が埋置していました。副葬品としては、短甲・環頭太刀・金製垂飾付耳飾・勾玉・金環等が出土しています。この古墳は古墳時代後期(6世紀末)に築かれた豪族の墳墓であろうと思われます。



## (市指定重要文化財) 建長の塔 玉名市山田所在

フジで知られる山田日吉神社の西の谷を距てた台地上に釣鐘の形をした塔婆が1基まつられています。塔身に建長2年(1250)に造られたと刻まれており、塔身の高さ97センチ、直径73センチというとても大きなものです。この塔は、虎御前という遊女が曾我兄弟の供養のために建立したという説と、藤原太子供養のために建てられたという説がありますが定かではありません。地元の人は「虎御前の塔」と呼びならわしていました。

また、神社鳥居前の毘沙門堂脇に建長4年(1252)の山田毘沙門脇の宝塔があります。

